

信濃漫錄

下

			和書門	
			八六七五	類
			九五函	
二冊	九架			

庫文閣内				和書	
		八六七五		類	
		九二函			
二冊	九架				

内閣文庫		
番號	和	8675
冊數	2 (2)	
函號	212	114



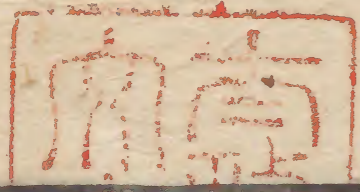
Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





或人云近ある書物のありきと云ふ書を後人をもとむ



海川ふ越えし例
たやし規艦とせし波海悉くより一紀あやといふに
あしむる者ハ老よとくれり後傑るれハ老よ老の人地い
た紀眼をさす海を企及ふべし
被書中ノ山はあもといひ海はあもといひよる
お毛海川ノ越えし例
延故要等保伎佐刀麻豆於久利家流伎美我許々呂波和須良
由麻之月是余いし越えし例
奥白波雖不知妹所云七日越來是ハ海ノ越也といふ例

後世漫録

十七

又とありけりハあいらねの内れとありけりハあいらねの事
なり西行慈圓の此格を犯してみまふと又言ありの句を
おかくと海もつととて述べてはありてはありとていふは文老
考りに對して是二は辨不大人言は

今此後も紙春冬月設而幸之^{フユタケテイナレシ}のたねはあともいふ
も六の事二句九言一句とせり此余あいらねの事とるは八言の
句六言の句ハ對集集外は後又後撰集もあいらねの事
とるは字あいらねの事あいらねとて今集外は八言の事とるは
の廓をわぬ事ハことこれの廓を出て是は西行慈圓ハ對集
又法界ハ後撰集ハ推察せりとの事とていふは右の傳ハ
宣も一語言とていふはこととていふは後ハ宣の

をたれまひてをいふは

○清濁音便

あいらねの事ハ郷土の事とていふは京師の人病床の事
ていひはは是江人の著せは清濁考也あら印行され見
ていひはは評いふとていふは後撰集ハ是に依りていふ
門人城戸千楯の事とていふは是古事記傳ありて
いふは是古事記傳ありていふは是古事記傳ありていふ
書に宣もいふは是古事記傳ありていふは是古事記傳あり
と不ふとせり古人を誣ゆの事とていふは是古事記傳あり
濁論辨一冊を著して門人御園を計勸言ハ附託し是にこ
論ハ古書の事とていふは是古事記傳ありていふは是古事記傳あり

たる後の物徳を考へても何れは平言音便多々れども其は音
便なく濁音るに流もあらずあはれ後の言よて書かたんとあ
るハさういふ言は流より考へて書かたんとて流におくを款
ハ推言を撰びも此の如く音便ハ上古も今も有るにや
濁音の音便の訛音よて正音なるハ後の言よても必清音な
るへて流ハ多々有るに濁音の音便あはれども其は音
つたると濁音も有るにやと濁音よて正音なるハ是は流して
やんたるともあらず濁音よて正音なるハ是は流して
能も初るにさへ近江の俗海量云今雅樂家よ傳へたる風俗
亦と強よ濁音半濁音ハさういふ言は又亦と云に今の如く
其の中も濁音の如くをさへあるにやと濁音るふは有るに

之守之清濁の
も古言は濁考
も父の濁も
あはれ考あり

しとて其の濁こり考ふよく符合せり
はてもあはれ音便なるれども其の如くをいひの如く濁
まはれつてその音便の自然なるなりとて假字のみこれ
たも其の音便よりなるとも其の如くは筋向を言ふ
まはれつてその音便の如くは假字のみこれたも其の音
便まはれつてその音便の如くは假字のみこれたも其の音
便の如くは假字のみこれたも其の音便の如くは假字のみ
るにや其の如くは假字のみこれたも其の音便の如くは
濁も其の如くは假字のみこれたも其の音便の如くは
音よ其の如くは假字のみこれたも其の音便の如くは
ありて其の如くは假字のみこれたも其の音便の如くは

秋めてそそき影は百小竹之三野乃王金厩立而飼駒角厩
 立而飼駒略何然大分青馬之鳴立鶴とありて及影は衣袖
 大分青馬之嘶聲云々とありたりあの金厩角厩とありて中
 へうしとありて青馬をわらうとありてこれとありて
 字ありてさうしとありて大分の二字も春の一字を得てさうしとありて春
 ハ亦雅は西風を春風とありてさうしとありて春ハありてさうしとありて
 春字とありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 やさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 此のうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 よありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて

○ 秋風のうし

考は風ハ秋の消息とありて秋風のうしとありてさうしとありてさうしとありて
 つまはたる消息とありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 あつた秋風のうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 とせ 此のうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 おきひたるハ秋風のうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 やありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 いひひとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 秋門人畠田村小島好平がうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 うしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 方との今もさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて
 るとありて伊勢の國号も飯稻とありてさうしとありてさうしとありてさうしとありてさうしとありて

高飯タカイと飯イはよしあることおやうきなりいふもくも
り古江大御神のまゝに御鎮座も五十鈴の枝長田エナガタよりある
く豊受大御神の遷座も飯イよりありとありの傳ツはされ
は撥霧集問答抄聴とのみ一冊を去てそまう中へ飯イなり
投てまゝなり
○いさう飯イはあまのりきり
茶葉チヤ十一は妹の飯上小竹葉野コタケハヤノ之のあまのりきり
地名ナ化カはあまのりきりきりきりきりきりきりきりきり
甲カに京師の門人城戸千楯チチカのいひをたはさるあまのりきり
おとよひしきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
越コ飯イ之ノまゝにありきりきりきりきりきりきりきりきり

之等云々本宮殿
とあり白江の
隈と又云々

た甲斐沖ハ志ね島とよみて伊勢とよれと次下の弁ヒナ乃
阿戸アト白波者といふ弁ええて近江の國に地名志ね島と右の小竹
傳もあう南とよみて近江の國とよれと志ね島とよれと上小竹
傳もあまのりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
ゆへ一回きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
ぬようきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

○あしれ婦メは志ね島のあしれ婦
志ね島はあしれをよみかたをいふかたやあしれ島に門人行置者
言ひいそく日本靈異記に近江國坂田郡志ね島の里とありきりきり
バ坂田郡と志ね郡とはもと志ね郡とありきりきりきりきり
跨る川ありきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

後醍醐

川... 〇志...

是ハ師のむり訓るもふよー... 考をいたくめでよりあむひてその門人... 訓をくたへその訓ハ靡根之孺乃命乃多田名附柔膚尚平 無所虚故名具鮫兼天 相屋常念而王垂乃越乃大野之云云...

木のまはれ群葉... 視よいまがしられいさふと鮫魚の... 可合物を奪くも... 多可半割と云奈も...

後を後編

程多し、四巻別紙よりひた

○ ぬくふと酒

是も栲布カクフの衾フシのぬふといふまゝのひた發法ハツクをいひて
きておつゝ、栲の穂とぬくづぬといひてきたるまじを
衾フシといふは、栲カクハ無益ムギのまゝありて、ぬくづぬとぬくづぬ
の字のまゝて巻の十六ハ高變領タカヘン為跡之御法ミツノミツ有者許曾吾
下衣變賜シタカヒ未卷ミマキの十ハ吾衣ウイ於君令服ウケニキ與登霍公鳥吾乎領ウケニキ
袖ソデ來居キキ乍ハの領の字を去れをりて、わづらひて、
づもたゝハ領着ネンキのまゝ、又巻十四ハぬくふとぬくふ
凡ソレの字をへともぬくづぬのお為ナリをえし、もぬくふハ、
衾フシハ領著ネンキて寐ネされとも子等コトナリう、
○ おもまゝ

中ナカ領ネンといふことす、でハ、
○ おもまゝ

是も同様、以蔣シヤウ為枕クシ高之眼目タカノメ故欲言ユヘニシ之始有此言乎コトナリと程記
より、
○ おもまゝ
師シ況キヤウは、
よ、
○ 二十五

母理國志多備之國ともつゞきたるは、
 考三 吾大王者隱久乃始瀨乃山爾
 神左備爾伊都伎坐等同 隱口乃泊瀨越如我手爾經
 在王者亂而有不言八方同 河風寒長谷乎歎乍公之阿
 流久尔似人母逢耶同 隱口能泊瀨之山之山乃際爾
 伊佐夜歷雲者妹鴨有牟 夷七 隱口乃泊瀨山尔霞立
 棚引雲者妹尔鴨在牟 同 狂言香逆言哉隱口乃泊瀨山
 尔廬為云同 隱口乃泊瀨之山丹照月者盈是為焉人之
 常無右等之分とつゞき考きハ泊瀨ハ上古の葬所とて山城
 の都の名跡山の類と云々もなり又卷十六は事之有者
 小泊瀨山乃石城尔母隱者共尔莫思吾背とある石城ハ卷五

本とあり 岩う浦への陵墓といふもめて城ハささきの伎同
 取圍ハ 石城ハあもるとハ死して葬埋せしめと云也此歌の
 ことを上の母にも引合て考きハ隱口ハ隱城の跡地なる一終
 考きさて泊瀨ハあもるとハ終と云ふもつゞきて別墓之俗と云う
 うゆくえりともぬ又分河といつゞきをえりたりも終處の色
 たるあもともやりの一又倭姫命 母化の志といひつゞきたるハ
 下部の志ハ備例ハ下部ハ葬地其志の 古日ガ死を云ふ之多故
 の使於比豆と云ふもと云へて地下ノ墓なるを云ふべくあといさ
 ためて後古事記ヲ神皇子の降生ハ此れことといひたるもあも
 ふよともい葬地と云ふもと云へておやと云ふなり終處といハ葬地ハ
 四葉解の志記といふ

久守三郎重光の
 ハ古事記ハ卷五
 ハ古事記ハ卷五
 ハ古事記ハ卷五

Handwritten notes in a smaller script, likely a glossary or supplementary text, located at the top of the right page.

○餞

Main text block on the right page, starting with '餞はうまれえかむもとくし土佐日...'. The text describes a scene of a farewell party, mentioning a horse and a boat. The characters are written in a cursive style.



Vertical text located below the red seal on the right page, possibly a note or a signature.

饗宴なるをさし

○刈婆加

Main text block on the left page, starting with '芳原四巻秋の田は穂田の刈婆加...'. The text describes a scene of a harvest festival, mentioning a field and a boat. The characters are written in a cursive style.

信野道編

の波里道可利婆祢尔ありふすしむる久於波氣又うをく又え
 たる莉婆祢ハヤ、同一云形ふいり上のもあてはんはた
 今おれ平よよを考ふに莉婆のハ形は壑道木州或ハ細
 竹たとの根形殊りまをりよま好くくその莉婆ハ籐とい
 ひて即籐多莉双の畧語とくまふ也麻と籐とあまふ古の例ハ
三卷解耶麻をのふ記あり
 さて莉婆加の加ハ処とゆふまゆてあまふすしり其此のま
こもあをりよまなり 籐合
 小をわりたりといひ莉婆せる根とゆふまゆとハりるたをく
 故籐ゆても萱ふてもりてとてあに加縁合の序とせ
 子ハ籐入へく熟る福穂はより家ありまをりよまゆてつひたをく
 ○あし曳のヤミ
 美奈四巻ふ記よ出

○浦回 磯回島曲

志れこと師ハ和と訓を室も麻とゆふたをく美奈事申よ
 和とゆめる何も麻とゆめる何もなりとてみて訓へたをく
 万とよびへくねもハ磯未浦未とをあらはれりて未と未は漢を以て今
 本の訓ハいりてとてまを巻十五ハ伊蘇乃麻由とあるハ石のる小
 て回のをとハふえと後ハ卷三ハ磯前傍手回行者とありて回を
 美の假字ハ用ひたり又四ハ稲日都麻浦箕乎過而たりて後委
 く美奈四巻ふ記よ出

○あし曳のヤミ

是ハ天よ夜更ゆりまひ日とつふまゆて心の一とよめり
 發語之ハシラコトハ神后紀ハ天照大御神の宣ま志ハ大御言ハ天離向津姫

と宣まゝ一ハ即日の法とかなるとれまゝ一

○みまじふ まじく

是ハ區志考ニ挙げたり大傳饌ニ傳ふ子區志といふまゝにほくく
と之區志ハ酒の古名久志の約め兼ふむ一ハ傳ふるといふまゝ
とむとく手向のむも同一

○箸じふ なせ

箸傳ふるおといふ一とよむよりおハ魚とまれ菜とすれ食ふといふ
當よりおといふと兼傳三卷解のふ記名とく一の條よりいふとく一

○なゆよみののの圖

○うちよむ まじく

○ゆく 字終

○あくく うら

右の四條ハ區志考ニ出して委しくせむとらおやうれど兼考
概の落葉よとく一とくハめつ一ももるハ省あり

○見常衣

州人小糸好平が問くハ兼傳卷十一ニ希將見君乎見常衣左
手之執弓方之眉根搔禮出の尋知ハ留めて法ハ例と承つとよ
礼ととも見たるハいふ一とく右ハ宣まゝ詞の玉の弦おも
まにを波遠く哥れ中に出せし言也 皇朝学の達人といひ
とも兼傳よおきてハいふとく一は兼傳二句を見常衣とよ
ひ一と下とく一受ハ體語とく受ハ例の色を見ハみとよむ一
ふハ常ハ登古の刻を留めてとくハ礼とともらひ格るま右

の哥多波遠へるふあはる今午の刊の撰を筆閑よとて
あはるしはるるあはるる

○阿由志太

豊後國佐伯の書生世傳三箇の己よりとてとて予ら齒の抜
たるとして先にお齒をあえすたなとてとておれとてい
らあをさといはるるさやとていへるる三箇のいへるるハ
西國ふて菓の類の指よとてを落しおををあやとていおれ
はるる落るとあえるといふとてとてとてとてとてとて
いへるる是古も今血をあやとていへるるさやとていへるる
十八は擲の哥阿由流實ハ多麻よぬよつともは纏てんも
あはるるさといはるるさやとていへるるさやとていへるる

要奴のに花咲はるるさやとていへるるさやとていへるる
十は水草の花の阿要奴蟹さよとも上は源氏よあえく
ええとてあはるるさやとていへるるさやとていへるる
あり方とては古言のゆきとて多よゆきは二男正睦の病
時秘波は連ねて門人土佐の國人小松親枝の療治とてと
てその業の虫身よとて花葉麻とてとてとてとてとてとて
たといはるるさやとていへるるさやとていへるるさやと
てとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
いへるる雅言よゆきとてゆきとてゆきとてゆきとてゆき
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと
もいへるるさやとていへるるさやとていへるるさやと
てとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてと

上の條より... 志の古言... 第拾卷十四... 計... 志の古言... 第拾卷十四... 計... 志の古言... 第拾卷十四... 計...

○ 中やり さやの中山 志の中山

門人甲斐國早河廣海云右等の中山ハ長山... 中と長と言... 清濁論辯... 志の古言... 第拾卷十四... 計...

今集は横... 中やり... 志の古言... 第拾卷十四... 計...

○ 中泊り

第拾卷十四信濃國水内郡の母... 中麻奈... 志の古言... 第拾卷十四... 計...

村の内よりあつてついで

○山とりのと名のついで

昔聖武十四之夜麻抄里乃乎呂能波都乎尔可賀美可家
カ奈布倍美許曾奈尔與曾利雞米

此哥四説は魏時南方獻山雄鑑形而舜といふとあきむとの
ちやをよめる哥といひた月とハ最末尾也といふとも末尾よ
りて説とくくごよとて四説ハおしあての強説之久老考
あし十四の卷ハ所説の如く岡本の宮の末藤原の宮の初めあ
ろの哥とてえても説集申よあつてこよとあきむといふゆ
ふととこの頃都人の哥あもつて國の故事あつてあつてハと
さつたよとまして東の國人の哥よさる故事よしつてくもあ

ら教師ハその頃京師人の東よ下とてさるがよあるさるへ
四説とたをけしきハ異なり考もあつてさるへハ通あり
畧解とらふとのよ或人の説とて山鳥の尾呂の説とは山鳥の
尾よ光あるといひて下のカ奈希倍美ハと補ふべこの説ゆて
山鳥の尾の末の光とせせて人もあつてさるへといふハ
いさうさたる説ゆて取よ是く更尾よ光あるといふて説
うけとてさるへさや古学者の考案と解ゆぬ可膳可敷右の哥
ハ初めれ二のハを門とていひぬし料の序とて門とハ終の尾
ゆて墓をいふるへとてさるへも終慶とてハ今のまよ
たりとてぬはらゆよりせぬ又哥よいづとてさるへといふも
終慶とてこの終とてさるへといふハよとてさるへといふも

少く右の号其を以てしうけたりなる國内かろし上回を
ししてハ襪くやうの事と申すけるとししてハ古とよたりき

○ 烝被 尔胡也我下

らまを系繁系今を此阿つぶとゆとよしたるハ火氣上行也と
字注のわきハ熱さまふてあつよとつるあるへんせどこハ古
事記ハ阿夜伽岐能布波夜賀斯多尔牟斯夫須麻尔胡夜賀志多
尔多久夫須麻佐夜俱賀斯多尔とわきハ烝ハ牟斯と訓べまよ
決まりさてこのまを考るにまづ古事記の号の阿夜伽岐
ハ綾垣アヤガキハ慢帳壁代の類をいふるへ緋垣とて林牟斯夫
須麻ハ筵被シロフスして下に引敷被也筵ハ身代ハ代ハ多尔多久夫須麻ハ上
ハ龍オヒキ為キる衣フスるへくかひあすりありさるハ古事記の号の注

抄
卷之四
阿夜伽岐能布波夜賀志多
尔多久夫須麻佐夜俱賀志多
尔牟斯夫須麻尔胡夜賀志多

ふも又美紫十四多久夫須麻志良夜麻可是能宿奈敵行母古呂
賀於曾伎能安呂許曾要志母とてハ古にいはるを併せまて
袴ハカマ袈カサ羅ラとわける発語を袴の白きとつくと申ハいされりかどあつハ
袴の袈或ハ袴布といひてり足るんと袈といもいへるハた白さにかける
のこの発語るねとあつハまゝハ志のえらむまをいひものにあつハの新羅
冠カウラらせたるも知と着のまわり又卷十四なるも子母るカウラとていふまを
袴と扱ハカマてり志カウラといふハのくおもひて後まうへりてこのあつハ
とゆと訓るとれもふも古の姓なるものふしてよつ袈
なるへ上を阿とゆハ即カウラ筵シロフス余オノ小對コタガヒハの名ふこをあるまを
て今本に次のを奈胡也我下丹とわけるハ誤なり系中系の字
を尔岐尔胡とよして奈胡とよむいともあるふも其ニ系廣
必尔胡岐オノカウラとまりて古事記尔胡也とわきハ奈尔オノカウラを志む
めたるものなるをおもひあふらめてよ下ハ書の名なるよりハ

久守云黄之兼
 何れかまよひ
 つまそてしう
 ともなきが藤の川
 波うちらり
 くれとありま
 とのこりま先
 けり

六十竹取翁下背を書書背とあるとす之下して心持也二天雲
 之五百重之下丹とあるも裏かきと知へし程之のまハ竹取翁
 の身の解かいへるをみえたるしむみむしむしむもももももも
 ○ みあせむく
 村田五海といはらくみあせむくとしあふと順射長のおふも
 後成マのおふもあせむくとみえむらうのりくし一本石ふも守し
 ふふぬるしゆいゆいゆいゆい久光着云まるあせをみあらとよ
 ひへさう禮の字とレの儀字とのまの人のゆきとレの儀字
 小用いたる例あて兼集中にみえたるゆきハ涼音レイゆ礼ハ
 レの儀字ハゆとゆりゆて又吳音レイるゆハラの儀字もゆ
 らへんゆさるハあら禮松系つゝ禮石さう禮石さう禮松の類の

久守云礼ハ盧
 啟切也

禮ハみろラとよむべしその別の例流葉集四の巻に記小悉
 く挙あげてさるを禮とレトよまありゆり禮と花の別の混
 しありあまきありて和名抄にも混したるゆきたりさて延喜
 式か儀系の條小下社上社松尾社別阿礼料又色帛者六止下社
 四上社盛河禮料管八合下社三合上社五合云云明櫛四合已上又
 一園韓神三座祭條荒管八合又二鎮魂祭條鹿管一合又三御襖
 條鹿御服二貝料布二段五色薄絶さく右に所引の鹿管鹿御服
 又三代實録宣命に加茂齋院を奉らるる奉を阿礼アラ焉等ヲト咩ト奉
 給といふとあり是ふを合せ思ふふあらハ明白落降のまふて
 明アの略語之志アのハ是ハ伊勢ふて明衣ミヤウエといふおふハ朝廷お
 て、齋後といひ加茂ふてハみあらといふるまハ齋院を

後世後孫

冬等云々和法に
 備へしものなるべし
 又今いふに
 即ち其人のねごと
 ありてはまこと
 来に大ねさの引
 もあつことよめ
 るしねと校麻
 の略法なり

あれをとめといふをもてあらハ齋のさるるを初り齋服を伊
 勢ふて明衣と云ふてあらハ明白アハカラの略法なりをさきりさへお
 の糸ハ神祇令云一月齋為大祀三日齋為中祀一日齋為小祀と
 ありて加茂系ハ中祀ふて午未申の三日也その初の午日みあら也
 ちうらハその日明衣を下上社松尾社ふなり神人氏人まで齋
 服を着る色ハこ色をふ配するをさあれむくとハいふるべし
 むくとハ今の世益をむくたると云むく也系作にてハ今も朝家
 の官法をさへめ下々の衣法もその糸の日より互れ抜ふうら
 ハ是りぬたるべし右ふむける鹿カ菅のあらハ明アハカラ櫃の明アハカラ也明
 白アハカラ浄のさへ也まこと明櫃の明アハカラハ韓カラ櫃とアハカラうらとアハカラ同義なり
 うらとあらといひうらさるるアハカラ浄ハ古事記ハ蛇の韓カラ鉞サハといふ

を目本紀ハ蛇の荒正アハカラとありととらアハカラまアハカラひアハカラといふさるる
 を古事記ハアトアハカラとを省す目本紀ハカトアハカラとを省くると
 の之あうらハもと明白アハカラ浄のさるるを一辨してうらアハカラとさるる
 のとアハカラいアハカラ襦アハカラ細アハカラとさるるアハカラあアハカラのうらアハカラといふさるるさるるうらアハカラあ
 おアハカラちアハカラらアハカラもアハカラなアハカラとアハカラいアハカラふアハカラ報アハカラのうらアハカラハ彼土より後アハカラまアハカラふアハカラとアハカラいアハカラふ
 たりうらアハカラむアハカラちアハカラらアハカラ衣アハカラうらアハカラ桂アハカラなどの類のあらハあうらアハカラの略法明
 白アハカラのやめ細アハカラちアハカラらアハカラ梳アハカラちアハカラらアハカラはアハカラをアハカラむアハカラらアハカラうアハカラさアハカラの類のあらハあうらアハカラの
 うらアハカラ也アハカラ撥アハカラ發アハカラのあらアハカラといふ

白のやめ細ちら梳ちらはをむらうさの類のあらハあうらの
 うら也撥發のあらといふ

名古卷のさしに物しと
よみぬとてあそびかるるに
父のうさのこしおれし信濃漫
深柳の落葉と友とられと
ふりて板ふらとてよみてさへ

斗類

らりれこる柳の落葉と

うさつあつ

色ありけり

えん人も



文政元年十月 荒木田久守

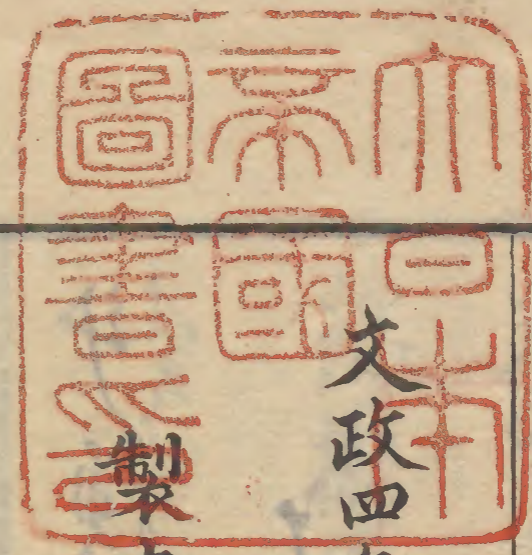
荒木田久老大人著述

信濃漫錄拾遺

近刻

五十槻園藏板

文政四年 辛巳五月刻成



製本書肆

名古屋

美濃屋伊六

伊勢物語圖會	三冊	百人一首摘要鈔	二冊	王之小櫛補遺	二冊
柏玉和奇集	三冊	雪玉和奇集	十冊	碧玉和奇集	三冊
題詠連璧集	一冊	馬名合之解	一冊	德本上人詠奇諺註	一冊
歌學集腋	四冊	信濃漫錄	二冊	名所今歌集	七冊
鹽尻初帙	近刻	同上	二帙	同上	

發行書林

名古屋小牧町

美濃屋伊六

